

「秋田大学学生海外派遣支援事業」帰国報告書

記入日：2011年2月16日

所属：教育文化学部 国際言語文化課程 日本・アジア文化選修

氏名：加賀谷 靖

派遣先大学名(国)：ウォンガン大学(大韓民国)

在籍身分：交換留学生

派遣期間：2010年2月～2011年1月

渡航年月日：2010年2月25日

帰国年月日：2011年1月24日

○ 研究・学習概要及び今後の勉学計画

ウォンガン大学では、大学敷地内にある語学院で、外国人同士実力別に分けられたクラスでそれぞれ授業を受ける。それにより、韓国語の習得を通しながら、それぞれの国について多くの話を聞くことができ、より刺激的な授業となる。

1年の留学の中で経験した不便と、身に付けた韓国語により、以前よりも韓国人留学生の助けとなれることの範囲が広がり、彼らに必要なサポートについて考えを深めることができた。自身の経験を生かし、留学生生活を快く過ごしてもらうためには何が必要か、今よりも交流の幅を広げるには何が必要なのかをこれからも考え続けていきたい。そして、秋田と韓国の交流促進に繋がるような仕事に就きたいと考えている。

○ 生活面について

男子寮において、日本人は私1人だったため、ルームメイトや同じ語学院に通う留学生との交流を大事にした。留学生とは必ず韓国人がルームメイトになるため、その仕組みをうまく利用することで、友達を伝えてまた新しい韓国人と出会うことができ、その出会いが帰国後も連絡を取り合う無二の友達になるまでに膨らんだ。

日本語教育科で行われる行事には全て参加し、出来る限りコミュニケーションをとるようにした。特に、秋田大学に留学する学生は、この学科から来る学生が多いため、秋田や秋田大学に関する話も多く交わした。

週末には、ウォンガン大学国際交流課の先生方が、留学生たちのために様々なプログラムを用意し、国内各地へと連れ出して下さり、ただ漫然と過ごしては出来なかっただろう多くの体験をすることができた。



○ その他留学全般にわたる感想

さまざまなことを実感した1年だった。

渡韓当初は、韓国語の分からない留学生たちはほぼ英語で会話をし、韓国人も英語で単語の意味を説明していて、英語の分からない自分1人取り残されている感覚を味わい、英語の重要性を実感した。また、韓国人の英語に対する関心の高さと熱心に勉強する姿勢に感銘を受けると同時に、日本の英語教育はまだ遅れていると思った。

会話が深まるにつれ、戦争について触れることも多くなった。サッカーで対日本戦の時特別激しく応援するのも、元を辿ると戦争で負けたことに起因しているということを知り、戦争を経験していない年代の若者でも敗戦のことは意識の中にあることに少なからず衝撃を受けた。ただ、かといって日本が嫌いだという人はおらず、むしろ好きだ、行ってみたいと言う人が多かったことが嬉しかった。

1年間の留学を通して、考えさせられるのは日本についてのことが多かった。韓国人は自分の国で問題が起きた時、皆真剣に考え、意見をぶつけ合っていた。韓国が好きなんだなあと、何度も実感した。それに比べ日本人は、自国の問題に対する意識が低いのではないかと思った。韓国という「外」に出て初めて見えたものがたくさんあって、そのどれもがかけがえのないものだった。それを気づかせてくれた人々、留学の機会を下さった大学に心から感謝したい。そしてこの経験を多くの人に伝え、多くの人に経験してもらいたい、そのため力になりたいと思った。